

モデルコース⑨ 時代を越えて継承される町づくりの息吹・葦崎宿コース

葦崎宿は、佐久往還と駿信往還(西郡路)に分岐する交通の要衝であり、人馬が盛んに往来する宿場として繁栄しました。特に釜無川の水運からの荷揚げ地界隈は、馬で荷物を運ぶ中馬で賑わいました。

その一方で、道沿いを流れる釜無川に翻弄された宿場でもありました。甲州街道を釜無川側に入った路地には、釜無川の氾濫から街を守るための古い堤防の痕跡があります。また、民家の間を当時の川の流れに沿って蛇行する脇道が複数走っており、それらの道筋は「水神」という地名が残る白髯神社方面を向いています。

間口税を安価に抑えるための細長い町割りが今も残り、商いを始める敷居が低い小さな物件が多いため、甲州街道と佐久往還に沿った現在の通りには、新しい事業に取り組む若者たちが集い始めています。ひと、もの、そして情報の交流拠点であり、商いをする気運に満ちた場所であったことが現代まで引き継がれ、今も更新され続ける「現役の宿場」です。



アメリカヤ

1967(昭和42)年に葦崎駅のすぐ側に建てられ、葦崎市のランドマークとして親しまれていた街で一番大きなビルです。ビルオーナーの逝去に伴い営業終了しましたが、外見はそのままに内部をリノベーションして、2018(平成30)年4月にリニューアルオープンしました。現在の新アメリカヤは1階にカフェ、2階にDIYショップ、3階に雑貨店などのショップ、4階に会社事務所があります。5Fは誰でも自由に利用できるコミュニティスペースで、大きく開放的な窓からは葦崎の街並みや富士山を一望できます。向かいには、築70年の長屋をリノベーションした「アメリカヤ横丁」があり、昔懐かしい雰囲気の中ではお酒を楽しめます。



葦崎宿

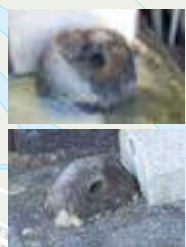
甲斐の国23番目の宿場。駿信往還(西郡路)、佐久往還の分岐点にあたる交通の要衝であり、富士川水運の物資の集散地です。1753(宝暦3)年に一ツ橋家の陣屋が置かれてからは、陣屋町として江戸時代の巨摩郡の中心地であるという一面もありました。商家が街道に沿ってやや斜めに立ち並ぶのこぎりの歯状の町並みが特徴で、主に本町通りなどで見られます。課税対象となる道に面した辺を狭くしながらもできるだけ幅の広い建物を作るため、あるいはハケ岳おろしと呼ばれる強い北風を防ぐため、などの説があります。

雲岸寺

「七里岩」の先端にある寺で、室町時代に開かれ、江戸時代初期、曹洞宗に改宗されました。七里岩の岸壁中段に掘られた洞窟の中にある窟観音堂には、聖観世音菩薩(窟観音)、弘法大師(空海)御尊像と無数の石仏「千体仏」が安置されています。地元住民からは「窟観音」という呼び名で知られています。七里岩は、ハケ岳の山体崩壊による岩屑流(岩石の破片、土壌、泥などが空気と混合して一気に斜面を流れ下る現象)が形成した土地を、東側の塩川と西側の釜無川が侵食してできた断崖です。現在の七里岩先端はコンクリートで固められていますが、掘り抜いた通路の壁は岩石の破片が入り混じってゴツゴツとしており、岩屑流によって形成されたことを物語ります。「葦崎」という地名は、ニラのように細長く伸びた七里岩の形状が由来ともいわれています。

馬つなぎ石

本町通りには、自然石に丸い穴を開けた「馬つなぎ石」が点在しています。これは、江戸時代、宿場に集う荷運びの馬をつないでいたもので、当時は数多くあったようです。馬をつなぐというにはあまりにも小さく見えますが、実は全体の三分の二ほどが地中に埋まっており、しっかりと固定されています。当時は「葦崎宿の名物は蠅」といわれていました。蠅がたくさんたかるのは、多くの馬がつながれて、フンでいっぱいだったからです。すなわち、それだけ栄えていたということ。大いに賑わっていた葦崎宿の様子が偲ばれる石です。



姫宮神社

本社は九州・宗像神社の三女神で、鎌倉時代に鎌倉(神奈川県)から勧請したのが由緒といわれています。舟山と呼ばれる高台の上にあり、境内から七里岩の先端が望めます。一説には七里岩と舟山が「脱み合っている」から「葦崎」になったといわれ、それがよく実感できる場所ですが、地名の由来としては「ニラのように伸びた七里岩の先端」からとったという説が有力です。境内には丸い穴のあいた石造物があり、覗き込むと穴の向こうに富士山が見えます。そのほか、山梨県内に特有の丸い石の道祖神(丸石道祖神)や、峠北地域(山梨県北西部)に多く見られる屋根の厚い石祠、相撲を奉納するための土俵などを見ることが出来ます。



原路

釜無川、尾白川、濁川などが氾濫して橋梁が落ち、甲州街道が利用できない時は、台地上にある脇往還を利用しました。この道を、川沿いにある基幹道「河路」に対し、「原路」と呼びます。葦崎宿から新府城の下を過ぎ、穴山村を経て日野原で逸見路の古道と合流し、花水橋を渡り台ヶ原宿に至る道筋と、日野原から渋沢・小淵沢を経て馬木宿に至る道筋があります。河路が通行できない時以外にも、諏訪の中馬は日常的に原路を利用していました。葦崎宿付近の原路は七里岩台地の上を通過しており、高所から葦崎宿や富士山を遠望できます。台ヶ原宿付近にある尾白川沿いの原路には、甲斐駒ヶ岳の花崗岩で作られた、白い道祖神や馬頭観音、庚申塔が佇んでいます。



モデルコース⑩ 往時の面影残す白砂と名水の台ヶ原宿コース

台ヶ原宿は、釜無川・尾白川が交わる地点の上流にあります。ここは、甲斐駒ヶ岳から尾白川が運ぶ、真っ白な石英質の砂が積もった扇状地で、2つの川に削られて河岸段丘状になっています。甲斐駒ヶ岳の花崗岩質の地層で濾過された水は、米や酒を作るのに適しています。

将軍用のお茶を京都から運ぶ「御茶壺道中」の宿として使用された荒尾田中神社や、明治天皇巡幸地の行在所(天皇の宿泊地)がある北原家住宅などの格式ある場所をはじめとして、沿道には古い町屋や蔵などが点在し、往時の面影が偲べれます。

台ヶ原宿

甲斐国24番目の宿場。宿の長さは約1kmで当時は道に白砂が敷かれ、街道沿いに植えられた松の並木が、美しい風景を作り出していたと言われています。「台ヶ原」という地名は、洪水で荒れた「大河原」だったからという説と、尾白川右岸から見ると台地状に見えるからという説があります。「北原家住宅」や「金精軒」など、往時の面影を留める建物が多く残されています。



白砂山自元寺

1570(元亀)年、武田信虎・信玄・勝頼の三代に仕えた馬場美濃守信房が白須坊田に建立、江戸時代末期に現在地へ移転しました。元々の寺は花崗岩質の白い山肌を持つ甲斐駒ヶ岳の麓にあったことから、「白砂山」と号します。



台原家住宅

甲州街道を挟んで台ヶ原金精軒の斜め前にある、1700(元禄13)年に建てられた築300年以上の古民家です。所有者である台原家は、室町時代にこの地を開拓した山高信重の末裔で、台ヶ原宿の鎮守である田中神社の社家を務める家柄です。金属板葺きの切妻屋根をいただく木造平屋建てで、江戸時代中期に建てられた数少ない社家建築の建造物として、1998(平成10)年に北社市の文化財に指定されています。



モデルコース⑩

コース概要
S G 市営台ヶ原宿駐車場
距離: 約6.5km 所要時間: 約4時間



荒尾田中神社

元々は荒尾神社と田中神社という別々の場所にあった2つの神社で、境内には本殿も鳥居も2つずつあります。新茶の季節には将軍用のお茶を京都から運ぶ「お茶壺道中」の宿泊場所としてこの神社の拝殿が利用されました。秋季例祭では、獅子頭ではなく虎頭を被って舞う「虎頭の舞」が奉納されます。昔は獅子舞でしたが、境内にある「虎石」の上に獅子頭を置いたところ祟りがあり、以来、台ヶ原では獅子舞が禁じられ、代わりに虎舞が舞われるようになったといわれています。山梨県内では台ヶ原地区のみで行われている貴重な舞で、明治時代に一度途絶えましたが、1991(平成3)年に保存会が設立されて復活しました。

北原家住宅

江戸時代末期に建てられた、切妻屋根の大型町屋。北原家は、信濃(現在の長野県)の高遠の造酒屋から分家して台ヶ原に移住し、1750(寛延3)年から酒造業を開始し、現在も日本酒「七賢」などで知られる「山梨銘醸」として酒造を続けています。「七賢」の由来は、北原家住宅母屋の新築時に、竣工祝いとして高遠城主の内藤駿河守から贈られた「竹林の七賢人」の彫刻欄間です。この欄間がある奥座敷は、明治天皇巡幸時の行在所でした。酒造りに使用している水は、甲斐駒ヶ岳の花崗岩質の地層で濾過された伏流水。信州高遠で酒造業を営んでいた初代北原伊兵衛が、甲州街道を通過して江戸を往復する途中、この水の素晴らしさに惚れ込んで台ヶ原の地に移住してきました。酒蔵内にはその伏流水を採水している場所があり、飲むこともできます。周辺には酒造りに使用している酒米田が広がります。

